

---

# ブレット・マイスター

yomo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブレット・マイスター

### 【コード】

N5820V

### 【作者名】

yomo

### 【あらすじ】

パン職人の主人公、陸が目の前に突然現れた少女と共に異世界に行く？

と言うよりも・・・半ば強引に連れて行かれ、その異世界で活躍してしまう物語。

・第1話・「ルシア」

この町に来て10年・・・  
町を一望できる小高い丘の上に店を開いてもう5年になるが、今では評判のいいパン屋で  
通っている。自分で言うところ少し照れるが、おかげさまで忙しい日々を送らせてもらっている。

私は、伊沙元 陸 35歳

ちなみに、まだ独身である・・・  
よくパートさんが私を心配してか見合い写真を持ってくるのだが・

「だからさあ、私たちパートのおばちゃんじゃなくてさ」  
「本当のパートナーが必要なのよ!」  
ストレートな・・・言われようだ。

「そういえば今日来たあの子は、どこの娘だろうね?」  
「見かけない娘だね・・・17、8つとこね」  
どうも私が休憩中に来店したお客さんの事らしい。

「ちょっと若いけど、ああいう娘も良いんじゃない?かわいくて・・・フフフツ」

「あら、あれは若過ぎじゃないの・・・ねっ店長」  
この二人がラストの日は、まさにお祭りの感じだ。

「はいはい・・・今日もお疲れ様でした」

「また明日、よろしく願いしますね」この人たちには敵わないな・

・  
・

次の日の閉店後・・・

「今日は来なかつたわね、あの娘」

「何か気になるんですか？」

どんな娘なのか私も少し気になった。

「勘よ！勘！女のね！」

「なに？気になるの？今度来たら声でもかけてみたら」

「はいはい・・・今日もお疲れ様でした」

「明日は、定休日なのであさつて、またよろしくお願いしますね」  
このままでは大変な事になりそうなので、早々に退散して頂いた。

いつものように、ビールを飲みながらブランドにあるベンチチエアに腰掛けて満天の星空を眺めていた。

そして、ぼんやりと昔の事を思い出していた。

先輩敵しかつたな・・・パンの世界に足を踏み入れてからもう1  
5年以上経つんだな・・・

先輩どうしてるかな？まあ、ほのぼのとした今の環境があるのも敵  
しかつた先輩のおかげ  
なのかもしれないな。

・・・・・・・・ん!?

何?・・・何事!?空に女の子!?一瞬目を疑った!

「酔ったかな・・・疲れてんだな・・・」

でも今日は、まだそんなに飲んでないのだが、疲れてはいるけど・・・それはいつもの事である。

これは、私の1日の勲章と思っている。

私は、女の子を見つめた・・・やっぱり浮いてるよな?

「もしかして幽霊?」

現実では、ありえない事が目の前で起きている?少なくとも私は体験した事が無い。

「えいつ!!!」

突如!私の体に何か見えない圧力が襲いかかった!

「・・・うわっ!!!」って・・・なんともなってない?・・・のか?

「ふむふむふむ・・・OK!合格!」

「それと・・・この間は、おいしいパンをありがとう」

すると・・・その女の子は、私の側にふわりと降り立った。

「なっ・・・何が合格?・・・いったい何の話だ?・・・お客さん?」

やはり目の前で起きている出来事がいまいち理解できずにいた。

女の子は、私を指差してこう言った!!

「簡単に言つと、ワタシはあなたを勇者に推薦します！」

「ゆっ・・・勇者？はあ？何者だ君は・・・」  
私は動揺を隠せなかった。

なんだか話しがおかしいぞー！ドッキリか？

女の子は、自分が他の世界から来た事を私に告げた。

「ワタシは『ルシア』よろしくネ」

第2話に続く・・・

- 第2話 - 「アースリア」 (前書き)

突然！夜空から舞い降りた謎の少女ルシア、そして勇者に推薦されてしまった主人公。35歳のパン職人の陸に訪れた異世界への招待嬢？

・第2話・ 「アースリア」

「ああ、「こちらこそ・・・よろしく・・・？」って、つい反応してしまっただ。

ルシアは、だれかと交信？している様子。

「はい、分かりました」

「あのさ〜もう冗談はよそうよ・・・カメラがどっかにあるんだろ？」

私は、この現実離れたバカバカしい状況がドッキリだと信じたかった。

「・・・何言ってるの？君は選ばれたのよ！」

「じゃ〜早速！出発しよっか！！」

「ちよつと待ってくれ!？」

本当にドッキリだと信じたかった。

「だいたい勇者が、こんな『おじさん』でいいのか？  
こんな状況で私は何て質問を・・・」

「普通はもっと若いだろう・・・10代か？」

「まあ〜500歩位譲って・・・20歳（ハタチ）前後位か？でも、やっぱり10代前半か？」

何をパニックしてるんだ・・・私は・・・

「心配ないよ」

ルシアは私の両手をそつと握りしめ、やさしくにつこり微笑んだ。

すると何やら周囲が輝き始めた・・・

「おっおい！ファンタジーなアニメじゃないんだぞー！……！！……！！」  
私は声の限り叫んだ！！

光は私の意思とは無関係に2人を包み込んでいった。

・・・しばらくすると光から開放された。

しかし、光のせいでまだ目が慣れていない。

何だか・・・すぐそばに人の気配を感じる。

突如！！

辺り一面が昼のように明るくなった！！

「うあっ・・・？」そこは、大きな屋敷の庭園だった。

そして、歓声の渦と共に宴が始まった。

「お待ちしておりました。勇者殿」

見た感じ騎士風の一人の男が話しかけて来た。

「勇者どの・・・って、やっぱりここは・・・異世界なんだ」  
そして、次の言葉で決定的となった。

「ここは、アースリアのセンターシティ・リド」

「私は、この街を守る第一防衛隊長のラークスと申します」

・・・私より少し若いかな？

「突然の出来事で驚いたことでしょう・・・でも、現実なのです」

「そして、あなたはこの世界に選ばれた3番目の勇者です」

1番目じゃないのか・・・

「正確には、まだ勇者候補とでも言いましょうか・・・」

「・・・勇者候補？他の2人は？」

ラークスの回答が帰ってきた。

「その人達は、もうこの世界にはいません」

「あなたがこの世界から戻る方法は幾つかあります、でも今は伏せておましよう」

おいおい・・・そこは、重要なところだろ！

そして次に私を見てこう言った。

「その格好では、何かと不便でしょう・・・何か用意させますのでこちらへ」

よく見るとパジャマのままだった・・・まだ、本当にドッキリだと信じたかった。

「皆は、このまま宴を続けて下さい」

「一つ聞きたい・・・勇者には年齢って関係ないのか？  
やはり気になってしまつのである。」

「・・・え？ルシアから何も聞いてはいませんか？」

「ご自分の姿を見てください」

ラークスの後を付いていくと大きな鏡のある部屋に通された

その鏡に写つた物は！？

「こつ・・・これは！？一体・・・」

目の前には、15、6年前の自分の姿があつた！

うん・・・500歩譲つたつて訳だね。

「ルシアは、本当に何も説明してなかつたのですね」

ラークスは眉間に手をあて、今の状態のことを説明し始めた。

「その姿は、あなたが今まで生きてきた中で1番・・・」

「そうですね、誰にも負けたくないという気持ちが強い時の姿です」

「今でも誰にも負けたくない気持ちは、変わらないが・・・」  
私は、すかさず反応した。

「・・・まあ、今は宴を楽しんで下さい」

ライクスは私の肩を軽くたたいた。

楽しい宴も終わり、私は静かに眠りについた。

第3話に続く・・・

・第3話・「センターシティ・リド」(前書き)

勇者に推薦された事実、ここが異世界アースリアだという事実を受け入れる現実！？

・第3話・ 「センターシティ・リド」

小鳥のさえずりと共に朝がやって来た

しかし、目が覚めても見慣れた家の天井ではなかった。

これからどうなるんだろうか・・・浦島太郎にはなりたくないよな・  
・

部屋にあった鏡を覗き込んだ。

「しかし、ホント昔の姿だよな」  
自分の姿を不思議そうに見つめた。

「まあなる様になるか」開き直るように自分に言い聞かせた。

太陽の光が降りそそぐ窓辺から外を眺めると  
そこには広大なセンターシティ・リドの街が広がっていた。

「おっはよ〜リク〜!!」

太陽より明るい元気なルシアの声が飛び込んできた!!

「おはよっ〜!!」「こちらも元気よく返した。

「さあ、今日は街を案内するよ」

「ゆ・う・しゃ・ど・の〜」

からかっているのか？

ルシアは、微笑みながら私の手を取り外に連れ出した

「オレは、何をすればいいんだ？」

勇者つてからには何か行動を起こさなくては・・・

「いい天気このリドの街はね別名『ブレットシティ』とも言われてたんだよ」

ブレットシティね

まずは、噴水のある大きな広場からスタートした。

定番と思いつつ街を歩いていると・・・

ゲームなんかにある『武器屋』『道具屋』などがあつた。

平和そうな街じゃないか・・・何の為の勇者？

「あれ？どうした？楽しくないかな？」

ルシアが私の顔を覗き込んだ。

「この世界つて魔法とかあるの？」

異世界だしな・・・思い切つて聞いてみた。

あつさり

「ん？あるよ」

「でも許可がないとダメなんだ」

「許可？許可なんかいるんだ」さすが異世界だな

そんな事を考えながら1日近くをかけて噴水の広場に戻つて来た。

「ふう～疲れたね～街外れまで行くには、あと2、3日はかかるかな」

街を案内され疑問に思ったことがある

それは、ケーキなどスイーツを売る店があった・・・  
しかし、パンを売る店が一軒も見当たらなかった・・・どうい  
う事なんだろう？

どこがブレッドシティなんだ？

「ねえルシア、この街のどこがブレッドシティなんだ？」

「・・・1年前まではたくさん在ったよ」

明るいうルシアの顔がくもった。

一体何があったというんだ？

「でも、リクが今ここにいるから大丈夫・・・ワタシ信じてるから」  
「前の2人も、この世界を救う為にがんばったんだけどね・・・」

やはり、パン屋が世界を救う・・・アースリアを救う？  
そういう事なのか？

「どうやって世界を救うんだ？」

ここに来てから????な事はっかりだな。

「・・・今日は、街を案内してルシア疲れちゃった」  
「明日にしよう！決まり！じゃ〜ね〜」

ルシアは行ってしまった。

私は呆然と立ち尽くす・・・

「はあ？」

「世界を救うのは、そんなのん気でいいのかああああ〜！」  
噴水の広場で私は、声を大にして叫んだ！

部屋に戻った私は、少し頭を整理してみた。

パン屋が無いのにブレッドシティ？

その理由は1年前の出来事・・・

この世界を救うパン職人・・・か？

まあ、他の人に聞いてもいいのだがゲームじゃないんだし明日話してくれるだろう。

多分・・・自分ものん気かな？

などと考えてる内に、美味しかった食事のせいか  
いつの間にか眠りについてしまった。

第4話に続く・・・

・第4話・「ドーキン」(前書き)

パン屋が無いブレットシティ・・・リド。その原因が明らかにアー  
スリアの危機に直面する陸！

・第4話・ 「ドーキン」

「おはよっ〜!!」

「・・・どうしたの？なんか〜まじめな顔しちゃって〜」

昨日と同じ太陽の様な笑顔のルシアが、ベッドで横になって考え事をしていた私の視界に飛び込んできた。

「おはよう、朝から元気だね」

「へへえ〜元気が一番でしょう!」  
確かにその通りである。

「ところで、このアースリアには国王とか居ないの？」  
この世界に来てから数日経過するがお会いしていない。

「勇者に推薦された以上、少なくともこの世界の為に動くんだから  
普通は、一番最初に通されてもいいじゃないかって思ったんだ」

ルシアは、少し困った顔をして・・・

「まあ・・・それには、色々あってね」

「すぐにはムリなんだよね〜・・・」

「でも今日は、ここ（アースリア）にパン屋さんが無い理由<sup>わけ</sup>を話さないかね」

少しうつむきながら、ルシアは口を開いた。

そして晴天の空の下、私はある場所に案内された。

その場所は、昨日案内された方向とは違って街の反対側である。

そこには、とても大きな樹があり、たくましい姿で迎えてくれている様だ。

その横には何か建物があつたのを思わせる形跡があつた。

「ここはねっ……」

ルシアが語り始めようとした時……ラークスが樹の陰から現れた。

「ここからは、私が話そう……ありがとうルシア」

ラークスは、ルシアの代わりに語り始めた。

「1年前は、このアースリアにベーカリーが612軒ありました」

「このリドの街には、359軒ものベーカリーが存在していました」  
世界の半分以上のパン屋がこの街にあつたとは驚きである。

「そして、この場所にはアースリアで一番のベーカリーがありました……」

「でも今は、何も無い……と」

「一体何があつたのだろうか？」

「着いて来て下さい。」

「お話しは、そこで致します。」

ラークスは口をつぐみ歩き出した。

着いた先は、『MEISTER・MUSEUM (マイスター・ミュージウム)』と書かれた  
巨大な建物の前だった。

昨日は、前を通るだけだった。改めて見ると大きいな！

「ここは、あらゆるマイスターに関する情報を管理している場所です」

「さあ、中に入りましょう」

重厚なミュージアムの外観を眺めながらエントランスへ入って行く。

私は、緊張しながらも好奇心でいっぱいだった。

中に入ると、そこには魔法で管理された空間が広がっていた！

「魔法か〜へえ〜」

ミュージアムの外観もすごいが、中に入るとまた圧倒されてしまう程の

造りになっていた。

「リク〜こつちだよ〜!!!」

ルシアが遠くの方で手を振っていた。

ルシアがいる場所に行ってみると『B・MEISTER』という表記があった。

「B・MEISTERとは、ブレッド・マイスターという意味です」  
ラークスと私は、歴代のB・MEISTERの映像の前で足を止めた。

「このB・MEISTERは、アースリアに7人いました」

「7人しかなる事が出来ないのです」

相当な狭き門という事なのだろう。

「この称号を受けた者は、アースリアにおいての上位的な存在となります」

ブレッド・マイスターの存在価値に驚きを隠せなかった。

「どの職業のマイスターもそうですが、ベーカリー界のマイスターは別格なのです」

「何よりも国王はパンをこよなく愛し、それは一番の好物で、他の何よりもひいきにしているんじゃない？」

「それを1年前のこと、ドーキンをという男が愚かな事をしてしまったのです」

「ドーキンは、『B・MEISTER』の称号が欲しいが為に……」

「絶対に使ってはならない禁呪を発動させてしまったのです」

禁断の魔法みたいなものか……？

どこの世界にもこういう奴がいるんだ……。

「……で、その禁呪とは？」

「その禁呪を使って……自分以外のアースリアの人々から製パンレシピの記憶を消し去ったのです。ただ、パンは美味しい物だという記憶はそのまま……」

何と言うメチャクチャな……どんな願いでも叶う魔法なのか？

「記憶を失くした人々は、何をやってたらいいか分からず正気を失う者まで現れました」

「特にひどかったのは、マイスターの7人が相当な精神的ダメージを受けたという事」

「幾らなんでも、そんな事って……」

少し大げさじゃないか……と、この時は思った。

「それだけ、パンの事を大切にしていたという事ですよ!!」  
ラークスの機嫌を悪くさせてしまった様だ。  
それに、ルシアの顔が悲しげに見えた。

私は、すぐに謝罪の言葉をさがした。

「自分もパンを作る者として・・・軽率な発言・・・申し訳ない」  
確かに自分もパン一筋だから、作れなくなったらどうなるだろう？  
考えただけで、底知れぬ恐怖を感じた。

再びラークスは、続きを語り始めた。

「ドーキンは、『B・MEISTER』と勝手に称しブンパ山さんのふもとにベーカリーを開きました」

「でも彼のやった悪行は、この世界の誰もが知っています」

「どんなにパンが欲しくて食べたたくても、誰一人として、

ドーキンのベーカリーにパンを買いには行きませんでした」

「私たちも、国王にその様な事情のパンを食させる訳にはいきませ  
ん」

アースリアの人々は、パンに対しての姿勢が半端な物ではない事が  
分かった。

「ある日、さすがにパンを作っても誰にも食べてもらえない辛さ・  
・からなのか

ドーキンは、ある行動に出たのです」

「私を屈服させたら、すべてを元に戻す・・・と」  
また、禁呪を使うと言っのか？そんな何回も使えるのか？

「製パンレシピの記憶を消した張本人が何を言ってるか」  
本当は、よっぽど辛かった？のだろうか。

「そうなのです・・・製パンレシピを失った今の私たちには、  
対抗できる者がいませんでした」

「言い忘れましたが、記憶を失った時に道具・オーブンの使い方も  
一緒に

消し去って、店にあったオーブンは、その物まで無くなりました」

『B・MEISTER』への憧れもここまで来ると・・・ただの悲  
しい患者だな。

「そして、やさしくてふくよかな国王は、好物のパンを食べれない  
事が原因で

食欲を失くし見る見る内に痩せていきました」

「今のスマートになった国王は、それはそれで良いのですが・・・  
ラークスの表情がよろしくない。

「以前のやさしさは無くなり・・・いつもイライラしている状態が  
続いています」

「このままだと、御身体にも良くないおからだ」

アースリアの国王とは、それほどのパン好きとは・・・

「今は、このリドの末端の人々の事さえもお気に掛けない始末・・・

「アースリア全体の危機を感じた私たちは、他の世界から力を借り  
ようと使者を送り  
協力を求めました」

「協力？」

・・・半ば強引？だった気が・・・ルシアと目が合った。

ルシアは、少し苦笑いをして視線を外した。

「ワ・・・ワタシちょっと向こうに行つて来ます！」

「・・・」

「・・・？」

ラークスは不思議そうな顔をしていた。

ラークスの話しが再び始まった。

「やっとの思いで2人の方を・・・そして陸殿あなたを見つけたのです」

本当にこの異世界アースリアを救うという事なんだな。

それと、国王も救わないといけないという事・・・も。

第5話に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5820v/>

---

ブレッド・マイスター

2011年11月20日18時58分発行